

横山大佐は第二十八師団の連隊長クラスの最古参、榊淵師団長とは陸士同期とも云われる。後任は宮川正少佐が命課された。又獣医部長の

後任は補充されず、宮田誠也獣医大尉が代理を勤めた。

第六章 敵機動部隊沖繩狙う

(1) 沖繩軍敵の新作戦警戒

宮古島に対する空襲は十月十日、十一日以来B24による偵察行動を除き殆んど杜絶えていたが、二十年一月に入るや果然活発となってきた。小型機の来襲の外にマリアナ基地から超空の要塞B29が飛来、高々度から綿密な偵察飛行を繰り返し、宮古島に対する敵の関心が窺われた。一月以降の主なる空襲記録次の通り。

一月三日 艦載機若干 五日 // 二機 九日 // 十三日

大型機一機、飛行場及び船舶を攻撃

一月二十一日 四次にわたり延三十六機が来襲、船舶及び飛行場銃

爆撃、我が方は地上砲火でその二機を撃墜

二十二日 午前七時十六分から午後四時迄の間延べ二十機が来襲、飛

行場及び船舶を銃爆撃、地上砲火でその一機を撃墜、

このような頻繁な敵艦載機の来襲は敵の有力なる機動部隊が宮古島近海（台湾東方海上）に腰を落ちつけて南西諸島をネラっていることを意味し、状況は極度に緊迫してきた。

第三十二軍では一月二十二日午後五時三十分次のように発表した。この前後現地軍は敵上陸の虞れのあることを懸念していたようである。

本二十二日七時より十七時二十分頃迄敵艦載機延べ七四五機、数次に亘り南西諸島全域に來襲、銃爆撃す、我対空部隊の精銳はこれを迎撃し

し、左の戦果（沖繩本島のみ）を得たり。

撃墜四十五機、撃破三十八機、我が方の損害極めて軽微なり。

尚、機動部隊に輸送船団なし。

不安と緊迫つづくうちに一月は過ぎ二月に入った。この頃は夜間の海上交通もB24などの大型機に妨害されて航行不能となり、宮古島は空海からの連絡を絶たれ、全くの孤立状態に陥った。目に見えない巨大な力がひしひしと迫ってくるような緊迫感が肌で感ぜられ、比島方面の戦況悪化とも俟って絶望的空氣が漲りつつあった。

果然内南洋ウルシー泊地に集結中の敵機動部隊は十日頃行動を始め、その動向は予断を許さないものがあつた。

これにつき第三十二軍は次のように発表、麾下全部隊に対し、警戒態勢を厳ならしめるよう命ずると共に官民の覚悟を促した。

（現地軍発表）昭和二十年二月十五日十二時太平洋前進基地を發した敵機動部隊は数日前より行動を開始し、蠢動しあるものの如く、諸情勢を総合するに十六日以降我が南西諸島は警戒を要するものあり

このあとの空襲状況については明確な資料がないが、八月十五日の終戦時まで多い日は延べ三百機が來攻、とくに沖繩攻略作戦が開始された三月廿三日からは英太平洋艦隊の艦載機をも加え毎日平均数十機を算え飛行場、港湾施設、民家などに莫大なる被害を与えた。

十月十日から終戦時までに来襲した敵機は

イ、戦斗を目的としたもの四、四五〇機

ロ、哨戒(大型機)一三〇機

ハ、飛行艇(海上に墜落した味方機の救助及び哨戒目的)六七〇機

計 五、二五〇機に及んだ。

大型陸上機のうち支那大陸から、また廿年七月以降は沖繩から襲撃した小型機も若干あったが、そのほとんどは米、英国機動部隊から発進した艦載機であった。

これらの米機が使用した爆弾は二五〇キロ程度のものが多く、市街地にも大分投下され、強力な破壊力を発揮したが、ロケット弾は発射と同時に物すごい音を立てて心理的な面でも恐怖を与えたものである。

(2) 集団戦斗準備下令

先島集団では敵の来攻必至とみて十二日麾下全部隊に対し戦斗準備を命ずると共に県立女学校及び平良第一国民学校に設けられていた司令部を十六日急遽野原越に移し、戦斗司令部を開設した。

戦原越戦斗司令部は擬装部落と洞窟司令部の二つから成り、洞窟司令部は野原岳の中腹をくり抜いた横穴の中に設けられ、甲戦備下令後は司令部の各機関がこの中に入ることになっていた。洞窟は十九年五月上陸した要塞建築勤務第八中隊が主となって集団麾下の各部隊や民間人協力のもとに造られ、規模は明かでないが、如何なる砲爆撃にも耐え数百名の司令部職員が長期間生棲し、指揮機能が發揮出来るよう設計されて居り、入口は二カ所、東北部に向かって開いている。この洞窟は六月二日の乙戦備下令後一時使用されただけで、平常は糧秣・弾薬・資材の貯蔵に充てられていたようである。擬装部落は洞窟入口に接し、師団長・参謀長宿舎、参謀部、副官部、管理部、兵器部、経理部、軍医部、獣医部通信隊、炊事所などを收容する茅葺き建物(師団長宿舎のみは瓦葺き)数十棟より成り、平常業務はここでとられていた。背面に野原岳を控えているので、南からの攻撃に対しては比較的安全だったが、北からの攻撃には位置をさらされるのが欠点だったが、この一帯は大体島の中央部

の海空よりの協力の程度などの諸要素によって異なるが、沖繩攻略の後掃蕩作戦程度の規模なら数ヶ月、本格的な攻略作戦(沖繩島攻略に先立って先ず宮古島を奪取して準備基地とする)に出た場合は

(一)第一波の水際戦斗に成功すれば三カ月

(二)第一波の水際戦斗に破れた場合は一ヶ月が持久の目標で、その見込みは十分あったと述べているが、要は仮定の域を脱せず、状況によってはかなり変わったものになったと思われる。

これ迄の米軍の上陸作戦の慣用戦法から推して先ず制海制空権を完全に手中に収めることを前提にしている。守備側は他地区からの兵力の増援は期待出来ない。従って手持ちの兵力だけで戦わねばならないので、消耗の度が増すに伴って戦力が低下し、しまいに尽き果てると云う結果に終わっている。

宮古島の場合は九州及び台湾、上海方面からする友軍航空兵力の威力圏内に位置、且守備隊上陸後三カ月も経ないうちに米軍の来攻に遭い殆んど無防備のうちに撃破されたサイパン島とは違い、防衛準備もある程度整っていることから推して、赤兎の首をひねるようには参らなかつたのではないかの予測も成り立つが何れにしても米軍の上陸作戦が行なわれたとしたら玉砕は免かれず、特に石垣島や沖繩島とちがって地形平坦な宮古島では避難個所に恵まれないので、一般民間人の犠牲は予想以上に出たのではないかと考えられる。

集団では戦斗開始となれば男子は老令者、児童を除き兵員の補充に、又女子は負傷兵の看護など衛生部隊の補助として使用することを計画していたようである。

二月十九日米大機動部隊は硫黄島に接近、上陸を開始し、太平洋の地獄と云われた硫黄島決戦の火蓋が切られ、南西諸島の危機は一応回避された形となったが、硫黄島の次は南西諸島がネラわれると云う予想は動かないとして軍官民の緊迫した空気は依然つづいた。

(3) 最後の輸送船も海底の藻屑に

にあたり、戦斗司令部の位置としては最も適していたと云える。

島の最高峰野原岳は大正十年作製の陸地測量部地図によれば標高一九八、六メートル、集団では8高地と呼んでいた。山と云うより丘にふさわしく、南の部分はゆるやかに傾斜して野原部落に接し、北側は一種の断崖状で山の形容がみられる。西北はなだらの丘陵が地盛を経て東仲宗根に伸び、又東南には花切を経て新里へ一連の丘陵がつづいている。更にその東北に細竹を起点にウズラ嶺、長山、仲原をつなぐ標高百米から六十米位の丘陵が連なり、更にその東北部は海岸沿いに下原、福里高地などが位置し、東北部からの攻撃に対しては地形的に極めて有利な条件に恵まれ、決戦場に適している。

野原岳頂上にはヤグラ型の野戦用乙警戒機(陸軍用電波探知機、対飛行機警戒可能距離三百キロ)二基が設けられていたが、性能は余り良好ではなかったようだ。

集団の戦斗態勢は野原岳を核心に宮古地区を北、中、南、東、海軍地区、伊良部支隊に分け、各地区隊に防衛を担任させ、敵進攻の状況に応じて兵力の機動集中を行ない、先ず水際決戦で上陸軍を破砕、これに失敗した場合は主抵抗陣地に拠って持久出血戦をつづけ、最後迄敵の飛行場使用を妨害、戦局全般に寄与することを主眼としていたが、持久戦法の背景となる陣地構築が爆薬、コンクリート、工具などの不足で予期の如く進まず、更に全島がサンゴ礁地質から成り、固い岩盤に掩われていることも作業進捗を阻む要因の一つとなった。又中央の呼号する航空決戦に副うて本意ならずも多くの地上戦斗部隊を飛行場設定作業投入を余儀なくされたことも陣地構築を大中に遅らせた原因の一つで、いろいろの悪条件が重なって二月末頃の陣地構築状況は所期の七〇%に達せず、若しこの時期に米軍の来攻を迎えたとしたら非常に苦しい戦いを強いられたのではないかと推測される。作戦主任の杉本参謀の回想によれば漸く自信の持てる陣地が出来あがったのは終戦の頃だったと云う。

次に米軍の上陸作戦が行なわれたとした場合、どれくらい持ちこたえられたかと云う点について杉本参謀はその時期、上陸場所、規模、友軍

硫黄島に、南方に、大陸に死闘つづくうちに二月は終り、三月を迎えた。三月一日早朝久しぶりに輸送船団が漲水港(いまの平良港)に入港した。

この船団は陸軍輸送船豊坂丸(一、九六六トン、浜根汽船所屬、塩崎政義船長乗組員四十四名)海軍輸送船大建丸(二、〇二〇トン、辰馬汽船所屬)と護衛の敷設艇つばめ(四五〇トン)の三隻で、大建丸は海上特攻艇と軍需品(糧秣・車輛・兵器・被服など)を搭載、鹿兒島、富江、那覇などを経て空襲と敵潜水艦の目を逃れ、ようやく宮古まで辿りついたものだが、その時既に敵機の哨戒の網にかかっていたようで、投錨後しばらくするとグラマン二機が飛来、銃爆撃を浴せて伊良部島方向へ飛び去った。

集団長納見中将は作戦準備上、重要欠くべからざる補給物資の無事陸揚げを期すため、対空部隊に対し船団掩護に万全を期すよう命ずると共に万一の場合は陸岸に乗り上げるよう手配を陸路参謀及び船舶輸送司令部宮古支部長入田少佐に厳命した。

海軍警備隊司令村尾大佐も又麾下の防空部隊を狩俣海岸に集結せしめ防空に万全の備えを固めさせた。

この間水上勤務隊に属する朝鮮出身軍夫百数十名(?)は船舶工兵隊と共に豊坂、大建両船に乗船、積荷の荷降し作業に取りかかった。緊張のうちに無気味な数刻が経過、ひる過ぎ突如東方から戦爆連合十数機が海軍飛行場上空をかすめて船団上空に殺到、ここを先途と撃ち上げる防空砲火を尻目にまず豊坂丸に銃爆撃を加えた。と、みる間に爆弾数発が命中したらしく、積荷のガソリンに引火、轟然たる音響と共に大爆発を起して黒煙天に押し、またたく間に海面から姿を没した。一方大建丸は全速力で右に左に敵機をかわして逃げ延びんとしたが、ときに一隊十数機、白川湾方面から飛来、集中攻撃を加えた。一弾が命中したらしく黒煙をふくとみる間に別の一隊十数機が急さんの如く襲いかかり、たちまち船体から火を發して炎上、間もなく海面から姿を没した。

のこる一隻敷設艇つばめは艦長の巧妙の操艦で敵機の攻撃をうまくか

わし沖合に逃れんとしたが、ついに衆寡敵せず、直撃弾を蒙り、夕刻頃池間島と伊良部島の間海域付近で海底の藻屑と消えた。

敷設艇つばめは排水量四五〇トン、水線長六五、五米、最大巾七、二〇米、吃水二、一〇米、機関出力二、五〇〇馬力、軸数二、速力十九ノット、備砲八サンチ高角砲一、機銃若干、機雷捕獲網三カイリ分その他、一九二九年七月十五日竣工、乗組員数は不明だが生き残りの下士官四十名は陸上に收容され、のち海軍警備隊に仮入隊している。

人的犠牲者の数は明かでないが、大建丸には船員五十四名の外警備員四十五名、海上挺進第二十八戦隊員八、同第二十八戦隊員三十四名の計一三一名、又豊坂丸は浜崎政義船長ら四十四名と警備員三十名（輸送船には敵機及び潜水艦の攻撃に備えるため、若干の部隊が常時配置され、高角砲、機銃、爆雷などの操作にあたっていた）が乗り込んでいたが、豊坂丸は轟沈状態だったため、かなりの犠牲者が出たようだ。従ってこの空襲で受けた軍人軍属及び船員の犠牲者は百数十名に上るものと推定される。

記録によれば生き残りの豊坂丸警備の海軍下士官六名、同船員二十九名、大建丸船長本田市太郎氏ら三十八名が救出され、のちに海軍警備隊に仮入隊している。

目撃者の話によると海面一帯が炎と化し、黒焦げの死体が多数狩俣や下崎海岸に漂着したと云う。

宮古島に対する海上補給は豊坂、大建両船を最後に完全に杜絶え、以後は輸送機に依頼するのみとなった。納見集団長は両船の喪失に失望部下の措置適切ならざるものとして入田少佐らを強く叱責したと云われる。

前記広田、大建、豊坂の三船を除き昭和十九年十月から廿年三月にかけて漲水港沖で米海軍機の攻撃を受けて撃沈された船舶は次のようなものである。

船名 撃沈月日 トン数

第十興神丸 廿年一月廿四日 二六〇

第三興神丸 〃 二四六

第四辰丸 廿年三月廿七日 一五六

第二南興丸 〃 一月廿二日 八三四

この外社団法人史料調査会（富岡定俊理事長）の資料によれば、宮古近海で次のような多くの船舶が撃沈されている。

月日 十九年八月九日

船名 船種 原因 トン数

昭慶丸 海軍輸送船 雷撃 二、五五七

日安丸 貨物船 雷撃 六、一九七

日満丸 〃 〃 一、九二二

神天丸 陸軍輸送船 〃 一、二五四

第二東勢丸 民貨物船 空爆 五〇〇

十九年十一月廿二日

船名 船種 原因 トン数

鳳山丸 民貨客船 雷撃 二、三四五

天草丸 〃 〃 二、三四五

十九年十二月十九日

雲竜 航空母艦 雷撃 二〇、〇〇〇

廿年三月一日

つばめ 海軍敷設艇 空爆

これらは宮古島向けの軍需資材や物資を積み、陸揚げ中を、あるいは南方から本土向け航行又は寄港中、米潜水艦及び航空機の攻撃を受けて撃沈されたもの、損害状況は不明だが、乗組員の大部分は船と運命を共にしたものと推定されるので、船員の犠牲者はかなり多かったようだ。

なお今次大戦を通じて沈められた日本船舶は実に二、三九四隻。八〇一万八、一二二トンに上り、船員の消耗率は陸海軍の二倍にあたる四十三％に及んだと云うから如何に船員の犠牲が大きかったかがわかる。